

CKJSだより

第57号

校長 松平 昭二

shoji_matsudaira@hotmail.co.jp

子どもの姿の共有

子どもも中学生くらいになると、操る言葉の巧みさに親の方がたじろぐことも少なくありません。かわいさゆえに親として発する言葉であっても、当の子どもの方はなかなかその真意を受け止めてはくれません。その顛末として、怒ったり諦めたり連続となります。家庭なりの一家訓をもち、子どもに対して一線を画することは、子をもつ親として当然のことではありますが、子どもを愛するがゆえに、信念とは言え悩み迷ってしまいます。

社会の評価や他人の思惑に振り回される必要はありませんが、子どもたちの生活圏が広がり、時として親以上の情報が得られる子どもに対しては、子どもの言い分を前に、これでよいのかと不安になることもあります。この不安を親一人で抱え込むことはある意味で残酷です。社会の様相が急激に変化し、子育てが難しくなっている今、「外」へ出ることの意義の一つはここにあるように思います。

また、目の前の子どもの姿が、すべての真実を吐露しているわけではありません。それは、どこまで行っても、やはり子どもの「一部」に過ぎません。丸い茶筒も、真横から見ただけでは単なる長方形にしか見えません。手元に引き寄せ、あちこちから眺めてみて初めて、その豊かな丸みを実感されるのです。

私たちの認識とは、見方によってはかくも曖昧で頼りなげなものです。鏡に映った姿を自分のものであると認識することさえ、元来は大変なことであるはずで、猿を使った実験では、まず敵と認識して闘いを挑むそうです。そのうちに自分の姿が映っていると猿も気づきますが、鏡の自分は虚像であり、本当の自分ではあり得ないことを猿に納得させることは難しいのです。



子どもたちはいろいろな顔をもっています。善し悪しは別として、親の前では見せたこともない顔を他人に見せることも少なくありません。その変幻自在な子どもの姿をもっと知るために、学校へ地域へと親自らが飛び出していくことが求められるのではないのでしょうか。自分では絶対と思っていることの中に、全く反対の事実が潜んでいるかもしれません。一人心に温める人生観ならまだしも、子育てにこの誤解は親にも子にも不幸です。

「子どもたちの生活の場の共有」「子どもを知る人たちとの触れ合い」「集団の中での子どもの姿との出会い」「子育てに関わる人たちとの交流」これらを実践する過程でこそ、丸い茶筒を実感することができます。そして、鏡に映っている姿を虚像と肯定する理性も生まれてきます。

うちの子は……と悩んでいるだけでなく、子どものもっている豊かな可能性と出会うためにも、学校や地域で見せている子どもたちの笑顔や姿をたくさん共有していきたいと思えます。

以前お知らせしましたが、**9月9日、16日、23日**に家庭教育学級を実施します。この機会に校長と話してみませんか。

ご希望の方は、**13時45分までに図書室**にお越しください。